

## IJF形ワールドカップ2008

小俣幸嗣

### 1. はじめに

2007(平成19)年に国際柔道連盟(以下IJF)の新会長に就任したマリウス・ビゼール氏の新しいプロジェクトの一つとして形(かた)の競技化が提案され、2009年の世界選手権大会開催に向けて一気に準備がはじまった。

今回の大会はそのテストイベントとして位置づけられていたもので、各大陸の足並みもそろっていない状況ではあるが、公認審査員を認定することがその目的であった。筆者はアジアの代表として、最初からこの企画に加わり、アジアでの形委員会の設置や審査員試験に関わってきたので、その過程を記すのが本稿のねらいである。

### 2. 形の競技化

柔道では形と乱取(らんどり)によって技術を修行し奥義に至ると示されており、それらの関係は文法と作文にも譬えられる。講道館柔道では形は9種類あるが、近年では「剛の形」「精力善用国民体育」をのぞく「投の形」「固の形」「柔の形」「極の形」「講道館護身術」「五の形」「古式の形」の7つが行われている。しかし、乱取の勝負を競う柔道が盛んになる一方で、形の錬磨、普及がおろそかにされている点はよく指摘されていた。

大陸レベルではパンアメリカンが早くから大会を実施していたようであるが、ヨーロッパでは2005(平成17)年に欧州柔道連盟が第1回欧州柔道「形」選手権大会をロンドン郊外で開催した。この大会を視察した講道館の代表、醍醐敏郎道場指導部長、村田直樹図書資

料部長は、出来映えは予想を超えてよかったと報告している。さらに東南アジア地区においては、投の形と柔の形のみであるが、2007年からSEA(South East Asia) Gamesで競技されている。

一方の国内では、1997(平成7)年に講道館と全柔連が開催した「全日本柔道形競技大会」がその始まりである。その後10回の国内選手権大会を経てからは、形の国際大会開催の機運が高まり、第1回講道館柔道「形」国際大会が2007年に講道館大道場で開催されるに至った。

### 3. IJFと形

IJFが形と関わるのは、2000(平成12)年、中村良三教育コーチング理事がIJFセミナーとして講道館柔道の形講習をローマで行ってからであろう。講道館から醍醐敏郎、佐藤正、仙石常雄氏らが講師として招かれ、約60名の参加者があったことが報告されているが、映像は公にされていない。

2007年には、山下泰裕氏が理事をつとめるIJF教育コーチング委員会から、「Judo for Self Defence」というDVDが発行されている。これは2006(平成18)年にサントドミンゴ(ドミニカ共和国)で行われたIJFコーチングセミナーにおいて、柔道や関連する技術による護身術という意図で紹介されたものである。したがって柔道や護身術の専門家らによって発表されたものではあるが、「講道館護身術」とは離れたものであった。

#### 4. 形委員会の発足

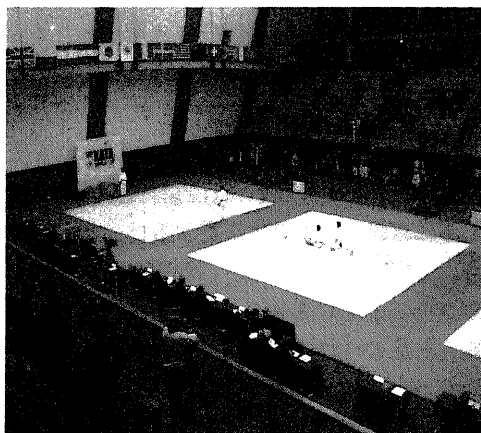
IJFは2008(平成20)年1月、発展プロジェクト委員長のジャン・ルック・ルージェ理事(フランス柔道連盟会長)が中心となり、初の形委員会がパリで開催された。会議は形委員会のフランコ・カベレッティ委員長(伊)がとり行った。各大陸の委員は、杉山正次(伊：ヨーロッパ)、竹内久仁子(米国：パンアメリカン)、小俣幸嗣(アジア)、アイバー・ディビス(オーストラリア：オセアニア)で、アフリカは不参加であった。

会議では、2009年に予定されている初の世界選手権大会に向けて次のことが話し合われた。IJF公認審査員を認定するため各大陸が公認審査員を用意すること、競技は講道館の形である「投の形」「固の形」「極の形」「柔の形」「講道館護身術」の5種類で行うこと、採点基準は欧州柔道連盟のものとすること、出場者・審査員の国別枠の設定などである。

当初審査員認定のためだった本大会は、名称も含めて世界選手権大会のテストイベントという意味を超える立派なものに感じられた。

#### 5. IJF形審査員試験

IJF審査員の受験資格は、あらかじめ各大



会場風景

陸の審査員資格を持ったものが対象で、各国2名とされた。11月20-21日、審査員受験者に対して、セミナー・試験が行われた。初日は各形の観察すべき重要ポイントと一般的な評価基準について説明があり、模擬演技について採点を行った。2日目は、受験者に対して自己の点数の妥当性について委員が説明を求めるインタビューが1人10分程度行われた。

認定は形ごとに行われるため、受験者数は形によって異なる。「投の形」は31名、「固の形」は31名、「極の形」は26名、「柔の形」は27名、「講道館護身術」は21名であった。結果は2日目の夕方に発表され、日本人2名(佐藤正、永井多恵子氏)を含む32人全員が初のIJF審査員として認定された。

#### 6. IJF形ワールドカップ大会

試合はフランス柔道連盟に隣接する道場で22-23日に行われ、23カ国が参加した。大陸別ではヨーロッパが中心であり、アジアは日本、イランの2カ国、パンアメリカンは米国、カナダ、コロンビアの3カ国、アフリカ、オセアニアは各1カ国ずつで、南アフリカ、オーストラリアであった。

選手数は、「投の形」14カ国18チーム、「固の形」14カ国16チーム、「極の形」11カ国13チーム、「柔の形」13カ国17チーム、「講道館護身術」11カ国13チームであった。

初日は「投の形」と「固の形」で、残りの3種類は2日目に行われ、ともに予選と決勝を別に行った。審査員は正面側に5人が1メートルおいて並んですわり全員同じ方向から見る形がとられた。

採点表は一組の演技者が終了するたびに形委員が評価点を確認しながら集めて集計者に渡された。結果の点数は演技者の半数を過ぎたあたりで会場にアナウンスされたが、観客も少ない会場の反応は静かなものだった。

結果としては、日本チームは「投の形」だけ



演技

ルーマニアに敗れて2位だったが、他はすべて優勝し関係者を安心させた。

今回日本の代表は「柔の形」のみ2007年の講道館形国際大会優勝者で、他は2008年の全日本形競技大会の優勝者から構成された現在の日本における最高の選手たちであった。日本人選手の演技には会場中の目が集中したくさんのビデオもまわっていた。日本人選手たちのそれぞれの演技はミスもなくほぼ最高のできだったと思われた。

外国人選手の水準の高さについて聞いてはいたが、よく練習され、仕上がっているという印象をもったし、成績の順位間にも大きな差があるわけではなかった。すべての演技は1か月後に、フランス柔道連盟のウェブサイトを通して世界中に公開された。

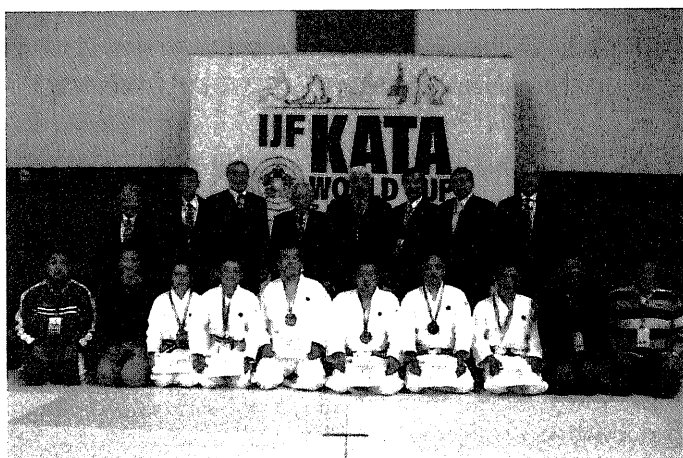
## 7. おわりに

審査員の採点は5人のなかで最高、最低点を除外した合計点で競われるが、集計のデータをみても、心配されたほどのばらつきもなく、結果はほぼ妥当な評価がくだされたように思えた。すべてが無事だったわけではないが、まずまずの大会だったといえるだろう。

今後、競技としてのシステム化が進めば、審査員の評価基準の統一が厳しく求められるだろうし、そのためにはルールとして規定されている動作にもより細かい記述が必要となるだろう。バイブルとなる講道館の形テキストの存在がより大きくなることは間違いない。

採点競技である以上、最終的に審査員の技術観が影響するのは宿命だとしても、技術の理合を習得し表現するのが形であるという本来の価値観を共有することは、将来的に難しくなっていくのではないかと危惧される。

したがって、審査員のセミナーでは実技を通じて、十分な共通理解と意思の疎通を図っておくことが今後の重要な課題になると思われる。



日本戦手団と役員